



主な出来事

- 1963(昭和38)年
4月 遠野市農業振興課(当時)を中心に、市内8農協がホップ導入について初めて協議
- 7月 キリンビールと栽培契約締結について協議決定
- 9月 遠野市ホップ推進協議会設立
- 11月 遠野市に初めてホップを植え付け(8畝)
- 1965(昭和40)年
11月 「遠野ホップ農業協同組合」が発足される
- 1967(昭和42)年
3月 集中豪雨と強風により、ホップが初めて大被害を受ける
- 1973(昭和48)年
6月 第一特産農業センターが松崎町に落成
- 1977(昭和52)年
3月 ホップ棚共済制度設置
- 1981(昭和56)年
4月 ホップ共済が制度化され、畑作物共済の対象作物となる
- 8月 台風15号により壊滅的大被害
- 1987(昭和62)年
9月 初のホップ生産量全国第一位
- 1992(平成4)年
1月 組合事務所を松崎町に新築(現在の事務所)
- 2002(平成14)年
品種転換(4品種から2品種「キリン2号」「かいこがね」に転換)
遠野産ホップを使用した「毬花一番搾り」発売
- 2004(平成16)年
「毬花一番搾り」を「一番搾り」とれたてホップ生ビール」に改名し発売
- 2007(平成19)年
4月 TKプロジェクト発足
- 2015(平成27)年
「ホップの里からビールの里へ」を新スローガンに策定
総務省の地域おこし協力隊制度を導入し市外から新規ホップ農家を募集
- 8月 遠野ホップ収穫祭を初開催
2500人が来場
- 2018(平成30)年
市、キリンビール、JR東日本盛岡支社の3者で地域連携協定を締結
- 3月 遠野市産業振興基金条例制定
1億円を積み立てる
- 2019(令和元)年
ふるさと納税(ビールの里プロジェクト)の募集を開始
- 6月 花巻農業協同組合から市に対し第二特産加工センター(上郷)の寄贈を受ける
- 8月 第5回遠野ホップ収穫祭を開催し、過去最多となる12000人が来場
- 2023(令和5)年
4月 新品種「MURAKAMI SEVEN」を本格導入・面積拡大
- 7月 キリンビール仙台工場が操業100周年を迎える
- 8月 60年目のホップ収穫を迎える
- 8月 第6回遠野ホップ収穫祭を4年ぶりに開催し、9000人が来場
- 11月 「一番搾り」とれたてホップ生ビール」が発売20年目を迎える

ホップ60年の歩み

1963年から市内で栽培が始まったホップ。キリンビールとの出会いから現在のホップ栽培の現状を振り返ります。

ホップと遠野 キリンビールとの出会い

ホップと遠野の出会いは今から60年前。冷災害が多く、農家や農業団体が遠野に適した畑作の模索を続けていた。そんな時、旧江刺市(奥州市)が栽培していたホップに目をつけたことがきっかけだった。ホップは冷害に強い作物で、遠野盆地がそれに適していた。昭和38年4月、当時の市内8農協でホップ導入を協議。同年9月に遠野市ホップ推進協議会を設立した。昭和40年には8農協が統合合併し、11月に



ホップ棚を作るホップ農家。昭和38年当時は機械もなく、ほとんどが手作業だった

遠野ホップ農業協同組合が発足した。

ホップの導入を検討していた当時、大手ビールメーカーは県内産ホップを使ったビールを製造していたが、キリンビールは製造していなかった。そこで昭和38年7月、ホップ農協と市は、キリンビールとの栽培契約締結を協議決定。キリンビールとしても岩手県産ホップを使ったビール製造は初めて。遠野もホップ生産をスタートし、互いに未知の世界への挑戦が始まった。

「一大ホップ産地」と 成長を遂げた遠野

本市においてホップ生産が盛んになったきっかけは、第一特産農業センター(通称・加工センター)の導入であった。ホップ生産を行い始めた当初、ホップの棚や乾燥機などは各農家が整備。新規就農するには費用面でハードルが高かった。これを解決しようと機械の共同化と機械施設の共同利

外国産ホップの台頭と 後継者不足の問題

昭和60年代から外国産のホップが台頭。国内でホップを生産していた農家は次第に別の作物へ転換していった。本市も農家戸数、栽培面積が減少。20年ほどで戸数は半減、栽培面積も78%と縮小した。その後、農家の高齢化と後継者不足が深刻化。離農者は少しずつ増えていった。

ホップ特有の「香り」が 付加価値のきっかけに

外国産ホップの輸入量が増えていた当時、キリンビールはホップの香りに注目した。通常のホップは乾燥後、ペレット状にしてビールの原料、苦みとなる。「ホップは苦みをつけるもの」という位置づけだった。

香りをヒントにキリンビールは研究を開始。収穫間もないホップを凍結・粉碎させることでみずみずしい香りのビールを醸造できた。そして、とれたてのおいしさを実現するために日本産ホップを使用することを決断。その後、研究を繰り返し日本産ホップの香りを生かした「毬花一番搾り」を平成14年に発売。2年後に「一番搾り」とれたてホップ生ビール」に遠野産と明記・発

売し「ホップの里遠野」として認知度を広げるきっかけとなった。

「ビールの里」具現化の 新たな取り組みが始まる

平成19年、市、ホップ農協、キリンビール岩手支社でTKプロジェクトを発足。平成27年に「ホップの里からビールの里へ」を合言葉にホップを生かした地域活性化が始まる。同年、遠野ホップ収穫祭の開催、ビアツーリズムの実施、地域おこし協力隊の募集を行う。同収穫祭は遠野産ホップのビールや食を楽しむイベント。初年度から来場者を増やし、第5回は12000人が参加。遠野を代表する夏の一大行事へと定着している。

ビアツーリズムはホップを観光の要素に取り入れ開催。ホップ畑、ビールの醸造所、観光地などを巡る事業は、「ここでもしか味わえない」体験を通じて遠野ファンを獲得。まちの観光振興に寄与し、市内飲食店でビールを楽しむなど新たな動きも見られる。

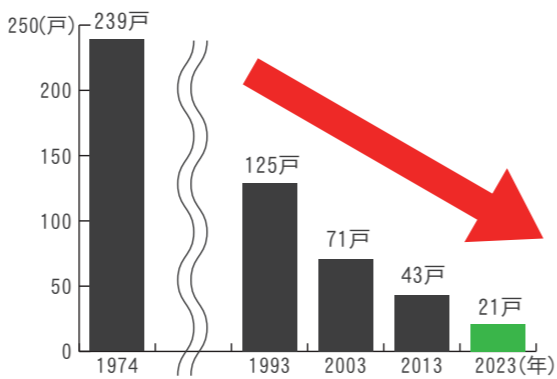
また、減少しているホップ農家に歯止めをかけようと就農フェアや地域おこし協力隊制度を活用。市外から新たなホップ農家を募集し、6人が就農(うち協力隊は4人)。本市のホップ産業は現在21戸が18畝を栽培している。

こうした動きを受け、市もホップ関連の予算化やふるさと納税の寄付金募集を開始。人(生産者)、物(ホップ)、事(イベント)、金(予算)の4つを通じて、「ビールの里」構想の具現化へ歩みを進めている。



今年度行われた収穫作業。地域おこし協力隊も参加し、共同で収穫

数字で見る市内のホップ農家戸数の推移



出典: 遠野ホップ農業協同組合



松崎町に整備された第一特産農業センター。現在は上郷・土淵町の2カ所がセンターとして稼働している

用を検討。国や県に補助を要望し、共同施設となるセンターを松崎町に設置。これを皮切りに上郷・青笹・土淵町に順次センターを建設した。

センターが設置されたことで、本市のホップ栽培は急成長。昭和38年に初めて植えたホップの面積は8畝。71戸から始まったホップ農家は、昭和49年、239戸まで増えた。同時に栽培面積も増加し、昭和58年には112畝。そして昭和62年には初のホップ生産量全国一位を達成。「ホップの里遠野」の地位を獲得した。